文化庁　令和七年度国語問題研究協議会「日本語の文字の課題と可能性」

日本人の漢字に対する評価意識について―支持・擁護と廃止・制限のせめぎあい―

東京女子大学　山本　真吾

○はじめに　「若者の漢字離れ」についてのインタビュー＝某中学校の文化祭のテーマから

日本人の漢字に対する二つの評価意識の相克

＊肯定的評価…教養を測る指標、文化的権威、書芸術としての支持・擁護論

＊否定的評価…利便性・識字率等に照らしての廃止論

一、上代日本語における漢字意識―漢字専用時代の日本語表記―

○太安万侶『古事記』序（七一二年）

已因レ訓述者、詞不レ逮レ心、全以レ音連者、事趣更長。是以、今、或一句之中、交二用音訓一、或一事之内、全以レ訓録。（已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮（およ）ばず。全く音を以て連ねたるは、事の趣更に長し。是を以て、今、或るは一句の中に、音と訓とを交へ用ゐつ。或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ。）

＊全訓方式…漢字の多義性、誤読を回避できない可能性。（例）「過」①すぎる。②あやまつ。

＊全音方式…正確だが冗長。　（例）桜花咲了。→左久良乃波奈賀左伊太

二、日本語の漢字における優位意識の流れ―文化的権威、教養・知性を測る指標―

（1）漢字の文化的権威―公式性―

①「真名」という呼称（『古今和歌集』真名序など）　←「仮名」に対して。

②漢字専用文（和化漢文）の維持、継承　→平安時代には平仮名も片仮名も成立。漢字仮名交じり文（東大寺諷誦文稿＝九世紀など）の存在。しかし、漢字専用文はその後も脈々と書き続けられる。

＊平安時代～鎌倉・室町時代

○紀貫之『土左日記』

男もすなる日記（＝男性の漢文日記）を女もしてみむとてするなり（＝仮名で日記を書いてみたのだ）。

○公家日記（御堂関白記）、法制書（御成敗式目）、史書（続日本紀、吾妻鏡）

＊江戸時代

○佐藤一斎『言志晩録』

少而学、則壮而有レ為。壮而学、則老而不レ衰。老而学、則死而不レ朽。（少にして学べば、則ち壮にして為すこと有り。壮にして学べば、則ち老いて衰へず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。）

＊明治時代

○森鷗外『航西日記』

八月二十日至二陸軍省一領二封伝一。初余之卒二業於大学一也、蚤有二航西之志一。以為今之医学自二泰西一来、縦使観二其文一諷二其音一而苟非二親履一其境一則郢書燕説耳。（八月二十日陸軍省に至り封伝を領ぜり。初め余大学を卒業するや、蚤に航西の志有り。以為く今の医学は泰西より来たれり、縦使其の文を観、其の音を諷ずとも苟も親しく其の境を履むに非れば、則ち郢書燕説のみ）。

③漢字で書くことにこだわる

（参考資料1）『御堂関白記』自筆本と古写本→自筆本の仮名（傍線部）を漢字に改める

（参考資料2）鈴鹿本『今昔物語集』の表記→行頭を漢字で揃え、漢字補充を期して欠字（□の空欄）

（2）効率性

○漢字専用文（和化漢文・候文）保存、維持＝情報蓄積機能（単に文化的権威だけではなく）

（例）今朝豪雨。列車混雑。隣人之傘接触我脚。甚不快也。可呪。（手帳の記録より）

（3）芸術性

○天平写経、三筆（空海、嵯峨天皇、橘逸勢）、三蹟（小野道風、藤原佐理、藤原行成）…

三、漢字廃止論の展開

○新井白石、本多利明…西洋文字の優秀性

○前島密「漢字御廃止之議」建白書（一八六六年＝慶応二）

○石原忍『日本人の眼』（一九四二年、畝傍書房）

わが国の文字が複雑であることも、近視発生の一つの原因として考へられる。すなはち漢字は字画が多くて読むのに困難であるため、自然それを眼に近づけて見るといふこと、漢字が読みにくいために眼

を疲労させるといふことが眼を悪くするであらうことは、容易に首肯し得られる（一四一頁）＊ホワニシャン　アストギク「近代日本における眼科学者の国字研究」（平成二十七年度第十回漢検漢字文化研究奨励賞・佳作）

四、日本語における漢字の課題と可能性

（1）現代の和化漢文・四字熟語の効用

○対多（ツイタ）「対多 - 偽中国語掲示板 -」 - Androidアプリ |APPLION

平仮名片仮名利用不可、漢字限定使用可掲示板。我偽中国語好、即印酢通留。非常楽、時間溶。掲示板色々有、聖夜予定又好寿司、尻取、週間少年飛翔、埼玉魅力求等。皆来請。（20241213：　えびたろう）

○四字熟語のポスター効果

（2）非淘汰性への対応―異字同訓・日本漢字音―

○異字同訓…「温かい」「暖かい」／「合う」「会う」「遭う」「逢う」

○日本漢字音…「行」＝修―：ぎょう（呉音）、―進：こう（漢音）、―脚：あん（唐音）

（3）日本語における漢字研究の可能性―裾野の広がり、外国人による日本の漢字研究―

○日本漢字学会編『漢字文化事典』（二〇二三年、丸善出版）の構成　※漢字の形・音・義＋漢字圏、写本・印刷等文献、教育、政策、芸術、IT技術等

○漢検漢字文化研究奨励賞の受賞論文のタイトル

・近代日本における眼科学者の国字研究（第十回）

・伊藤博文をハクブンと呼ぶは「有職読み」にあらず―人名史研究における術語の吟味―（第十一回）

・漢字統一会に関する一考察―清国と韓国の反応を中心として―（第十四回）

・ベトナム加点資料の句読点から見た訓読の可能性（第十五回）

・明治期の速記術に取り入れられた漢字と乎古止点（第十七回）

・漢字の字体・字形の正誤基準に関する考察―戦後の学力調査にみられる漢字書き取りテストの分析を通して（第十八回）

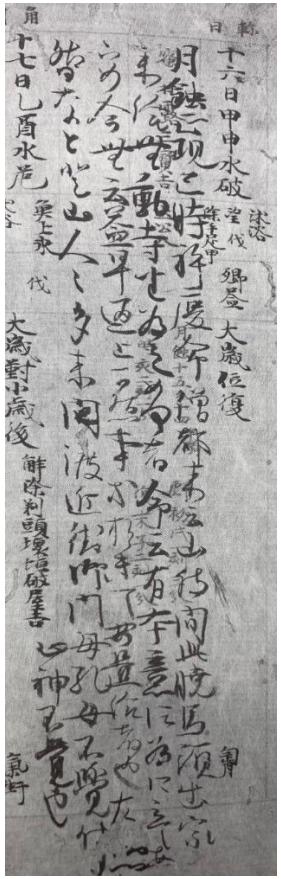
（4）手書き文化の可能性

漢字の手書きは文章力の発達に独自の貢献をする―読み書き発達の二重経路モデルの提唱―一京都大学

（参考資料１）

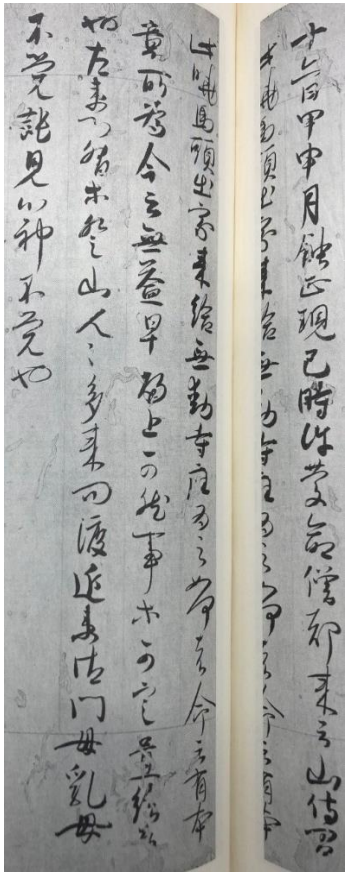
十六日、甲申（略）

月食正現。巳時許慶命僧都来云、「山侍間、此暁馬頭出家。来給無動寺坐。為之如何」者。命云、「有本意所為にこそあらめ。今無云益。早返上、可然事等おきて、可置給者也」左衛門督など登山。人々多来問。渡近衛御門、母乳母不覚、付見、心神不覚也。



（陽明叢書　記録文書扇第一輯　御堂関白記二　自筆本［自寛弘六年／至寛仁四年］昭和五八年、思文閣出版）

十六日、甲申。月食正現。巳時許慶命僧都来云、「山侍間、此暁馬頭出家。来給無動寺坐。為之如何」者。命云、「有本意所為、今云無云益。早返上、可然事等可定置給者也」左衛門督等登山。人々多来問。渡近衛御門、母乳母不覚、託見心神不覚也。



（陽明叢書　記録文書扇第一輯　御堂関白記三　古写本［自寛弘元年／至長和元年］昭和五九年、思文閣出版）

（参考資料2）

鬼現板来人家殺人語第十八

今昔、或ル人ノ許ニ、夏比若キ侍ノ兵立タル二人、南面ノ放出ノ間ニ居テ

宿直シケルニ、此ノ二人本ヨリ心バセ有リ、□也ケル田舎人共ニテ、大刀ナド持（モ）テ、不寝デ

物語ナドシテ有ケルニ、亦其ノ家ニ所得タリケル長侍ノ諸司ノ允五位ナドニテ有ケルニヤ、上

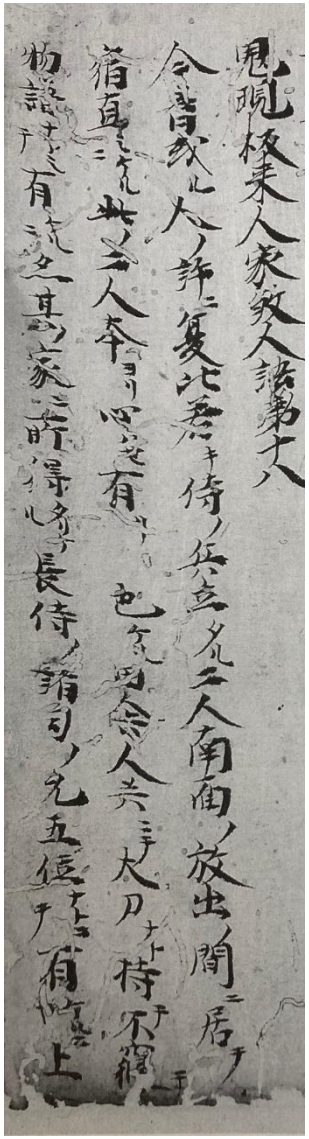
宿直ニテ出居ニ獨リ寝タリケルガ、然様ノ□ナル方モ无カリケレバ、大刀・刀ヲモ不具ケルニ、

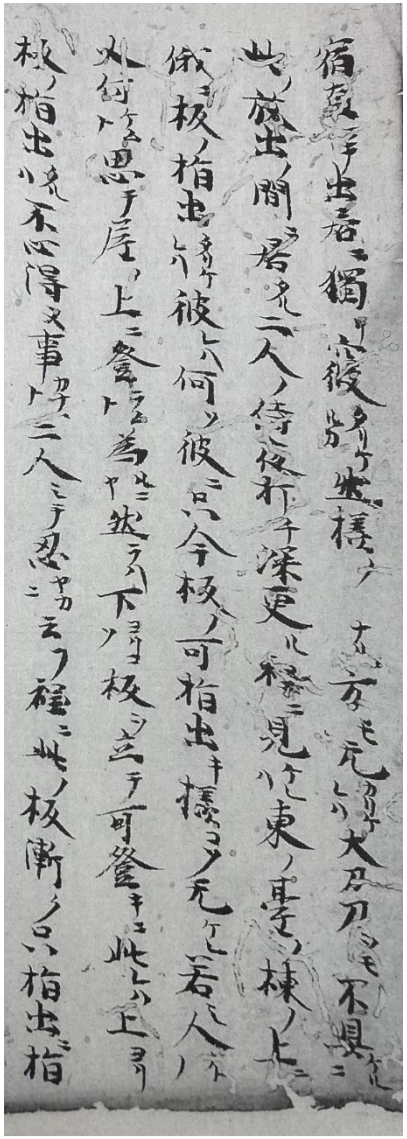
此ノ放出ノ間ニ居タル二人ノ侍、夜打チ深更ル程ニ見ケレバ、東ノ臺ノ棟ノ上ニ、

俄ニ板ノ指出タリケレバ、「彼レハ何ゾ、彼ニ只今板ノ可指出キ様コソ无ケレ。若シ、人々ナドノ

火付ケムト思テ屋ノ上ニ登ラムト為スルニヤ。然ラバ下ヨリコソ板ヲ立テ可登キニ、此レハ上ヨリ

板ノ指出タルハ不心得ヌ事カナト二人シテ忍ヤカニ云フ程ニ（以下略）





（鈴鹿本今昔物語集　影印と考証、平成九年、京都大学学術出版会）